

## 編集後記



私事で恐縮だが、原子力分野の中でも縁の下の力持ち的存在の“中性子核データ”の測定屋として入所して十数年経ってから、それまで存在すら知らなかった“中性子星”だの、天上人のやることだと思っていた“量子色力学”や“高エネルギー物理”に関係する研究室に所属するようになるとは全く考えたことも無かった。その間、世の中ではチェルノブイリやJCO事故があり原子力をとりまく諸情勢は大きく変化し、他方、“ヒトゲノム”なるものの解読がほぼ終わり、トップクォークやヒッグス粒子が発見され、またニュートリノに質量がある（らしい？）ということになったりした。一方で、小生の最初のテーマである中性子核データは、宇宙での元素合成と深い関係があり、核データの計算に使う理論を使って中性子星の構造研究ができることが分かった。科学や技術は時として複雑であり、時として単純であり、思わぬところに相関があり、その相関から新しい発見が生まれることがある。現代の変化の早さは想像を絶するもので、原研も変化を遂げる必要があるのは事実であるが、原研の築いてきた伝統を生かしつつ新しい世紀の科学技術をリードできるような原研独自の文化を築けたらと切に希望する。(S.C.)